潟語り（かたがたり）（二十九）

文・小西一三
絵・小西由紀子

釣り人で賑わった八竜橋一帯

八竜橋のたもとにある武藤釣具店は、天王、船越地区では最初に開店した釣具店。

役場に出勤するご主人の武藤守さんに代わり、店を切り盛りするのは奥さんの鈴子さんでした。開店当時の様子について鈴子さんにお聞きしました。

とにかく魚がいっぺ釣れたものなあ

家は橋のすぐ近くだんすべ。釣りの人が増えてきた時代だったから、人に勧められて昭和四十年頃に始めたのよ。最初の頃は餌専門で、自宅の玄関先でゴカイなんかを売っていた。その頃は八竜橋もまだ木造で、新しくなったのは四十二年頃だと思うな。

お客さんが次々に来るもんだから、餌は売り切れる。父さんは勤めで出てるから、私が船越とか若美の業者まで餌を仕入れに行くのよ。その間、近所の人が店番してくれてな。お客さんは少しでも早く餌を買いたいもんだから、順番を書いた札を持って玄関で待ってる。私だば、自分で餌を仕入れるために車の免許を取ったんだがら。

当時はグンジがいっぺ釣れたもんだよ。天気がいぐて水の澄んでいる日だば、水の底のグンジの姿が見えるもんだもの。ご飯つぶとかシジミ貝の身をちょぴっと付けた針をグンジの口の近くに持っていけば、パクッと食いつく。ゴカイの餌なの使えば、大きいグンジの百匹、二百匹は普通に釣れたもんだよ。

一応、釣り道具なんかを置いて、店らしい姿にしたのは昭和四十七年。五十年頃からは貸しボートも始めた。最初の頃は近くの船大工さんに木造のボートを作って貰ってな。その後はプラスチック製になっていった。他にも貸しボート屋がいっぺあったもんだがら、秋のグンジ釣りの季節になれば、橋の近くなの隙間がねえだけボートがびっしり並んでな。それでもグンジはすごく釣れたもんだよ。

タカノハガレイ、セイゴ、川鯛（クロダイ）も釣れた。ショウブ（サヨリの小さいもの）は大群も岸に寄って来たもんだよ。んだども、防潮水門が立派になってからは魚も本当に少ねくなってきたな。